平成2年(1990年)2月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
2　FEBRUARY, 1990　毎月10日発行　第118号

教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
©1990
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12−6
☎(0797)31−3452

灰のなかに勝利の約束をみつけよう

1 「隠れたことを見られる父」(マテオ6・4、18)

今日から四旬節が始まります。教会にとって四旬節は特別な時・密度の高い季節です。

典礼は初日から、いくつかの「強い」言葉・根本的な言葉を伝えます。これらの言葉の力を受けて、四十日間をしっかり過ごす準備をしましょう。四旬節の教えは底知れず深いものです。私たちは、この期間、霊的に心を集中させ、深い信仰のうちにいっそう熱心に生きるよう求められています。

「隠れたことを見られる」御方、私たちの父である御方の現存のうち生きなければなりません。

2 「ちりであって、ちりにかえるべき者よ。」(創世の書3・19)

灰の典礼の中で教会が語るこの強い言葉を私たち一人ひとりが心に刻みつけます。

私たちはみな揃ってこれは明らかな教えであると考えます。創世の書が示すこの言葉は、始めから人類の歴史につきまとう死とその法則について述べています。

神は、人間を生きるために創造されたにも拘らず、死がこの世の人間の定めとなりました。

死の法則の源は罪です。人祖の犯した罪の結果なのです。創世の書(3・5)が記すとおり、「善と悪を知って神のようになる」、つまり人間が自ら善悪の基準になることを望んだがために受けた罰なのです。「ちりであって、ちりにかえるべき者よ。」これは、人間が原罪を受け継いでいることを示す言葉です。

人類の歴史によって確認されたこの言葉が正しいことを私たちは認めています。

ところで、この救いの時にあたる今、私たちは創世の書の言葉に隠されたまことに深い真理を再発見するよう招かれています。これができるため、まず私たちが〈自分自身〉の中にある〈内なる〉部屋に入って、「隠れたことを見られる」創造主・御父と共にいるようにしなければなりません。

3 灰の水曜日の典礼の中で教会は、いくつもの〈強い言葉〉を語りますが、なかでも「悔い改めて福音を信じよ」(マテオ1・5)という勧めは、私たちを強く促す重要な言葉です。

人類史の入口で立ち止まるわけにはいきません。歩みを続けなければならないのです。「隠れたことを見られる」神の注意深い眼差のもと、最後までやり通さなければなりません。神は人類の歴史、創造の歴史によい知らせ・福音をもって入り込んでおられます。

改心しなさい。

教会はキリストと共にこの強い言葉を語り、キリストの使者としての役目を果します。(コリント②5・20)

「ちりにかえる者」という言葉だけでなく、教会が絶間なく繰り返すが特に今日ちからを込めて繰り返す呼び掛け「神に立ち戻れ」、「神に立ち返って福音を信じよ」という言葉も、この世に生きる私たちにとって重要な意味をもっています。

これは一体どういうことでしょうか？　神は罪を知らなかった御方を私たちのために罪とされた。それは私たちがその御方において神の正義となるためでした。(コリント②5・21参照)

良い知らせの名において、今日、教会は額に灰をかけます。それは、人間の死を示す灰の中に、〈死を越えた勝利の約束を見出しなさい〉、額にかけられた灰の中に、罪に打ち勝つ〈勝利の救いの力〉を見つけなさい、と言っているようです。十字架にはりつけにされたキリストの力による勝利のことです。キリストのおかげで、私たちは神の〈正義〉となることができるのです。

4 これが四旬節の呼び掛けです。きょう教会はこの言葉を特に力を込めて皆さんに送ります。この呼び掛けに耳を傾け、悔い改めの大切さを真剣に受け止め、霊的に生れかわらなければなりません。そのために、施しと祈り、断食を実行しましょう。

自分の部屋、心と良心の奥底に入り(マテオ6・6参照)、そこで「隠れたことを見られる」御父と共に留まらなければなりません。神の眼差が私たちの中で力を発揮するよう協力しましょう。神が救いのみわざを実現なさることができるよう、私たち自身の中にそのための場を作らなければなりません。

四旬節の間は、常にもまして私たちの命がキリストと共に神の内に隠れていなければなりません。(コロサイ3・3参照)

そうすれば、「隠れたことを見られる父が報いてくださるだろう。」(マテオ6・4、18)

(二・八)

救いのみわざと歴史

ロザリオ・苦しみの玄義

復活祭へと向かう四旬節の旅路の間、この日曜日のマリアのための祈りの集いにおいて、ロザリオの苦しみの玄義についてじっくり考えたいと思います。その間、私たちと一緒にいてくださるのは、受難の頂点の部分を目撃なさった処女マリアなのです。

〈秘義〉と複数で話しています。何故ならそれらは共にイエズスの生涯中の数々の出来事と私たちの救いに関わる事実だからです。それらはイエズスが歩まれた一筋の道であり、また、私たちが回心によって神との交わりと他の人々との新たな兄弟愛を体験できるようにとイエズスが私

たちと歩まれる道なのです。

今日は苦しみの玄義の第一、ゲッセマニの園でのイエズスの苦しみについて黙想しましょう。この玄義で私たちを導いてくれるのは、福音史家聖ルカです。ルカは、イエズスが高間を去って「いつものように」オリーブ山に行かれたと告げています。主は一人で行かれたのではありません。弟子たちが、訳はわからぬままに主に従って行きました。この出来事の始めと終りに、二度彼らに〈主の祈り〉で毎日祈ることをお勧めになりました。「誘惑に陥らぬように祈れ」と。(ルカ22・40～46)

今日、そして来るべき四旬節を通して「誘惑に陥らぬように祈れ」というこの神の御言葉を〈旅路の糧〉として、目覚し役として受け入れましょう。

イエズスは、生涯最大の試練の時に一人で祈られます。「御自分は彼らから石を投げて届くほどの距離をおき、ひざまずいて祈られた。」(ルカ22・41)

その祈りは御子としてのもので、これから起ろうとしていることを思って苦しみもだえながらも、忠実に御父の御旨を受け入れようとするものです。「父よ、御旨ならば、この杯を私から遠ざけてください。しかし私の意のままにではなく、あなたの御旨のままに。」(ルカ22・42)

それからイエズスは人間としての自らの全てをまきこんだ劇的な苦しみへと入っていかれました。「御汗は血のしずくのように地に落ちた」けれども、イエズスは「いよいよ切に」祈られたのです。(ルカ22・44)

皆さん、イエズスを黙想しましょう。肉体的に苦しむイエズス、心理的精神的苦しみにもだえていらっしゃるイエズス、見捨てられて孤独なイエズス、そういう中にあっても御父に対して全く忠誠を固守しようと努力して祈られるイエズスを黙想しましょう。

この四旬節中、私たちには特別な仕事があります。苦しみと憐れみに熟慮した御方(ヘブライ5・1～10参照)すなわちイエズスの苦しみの光にあてて私たちの苦しみについて考えることです。そして祈ること、もっと祈らなければなりません。

部屋にかくれてする祈り(マテオ6・6)、私たちの仕事を捧げることによる祈り、神の御言葉に耳を傾け黙想する祈り、ロザリオを唱える家族の祈り、内的生命の源泉であり頂点である典礼の祈り。

至聖なるマリアは、毎日の祈りを通して神に心を上げる時と同様、従順な愛の態度で私たちが苦しみを受け入れる時の先生です。特にこの四旬節の間、マリアの学校に入学し、熱心な生徒になりたいものです。

教会の教えは逆らいのしるし

教会の倫理・道徳に関する教えを自分で勝手に選択し、自分で良いと考えるものだけを受け入れる人がいます。また、教会の教導職に異議を唱えても、良いカトリック信者であり、秘跡にも与ることができる、と主張されることがあります。しかし、これはアメリカであれ他の国であれ、司教の教導職に挑戦する重大な誤りです。(…)

キリスト御自身と同じくキリストの教会の教導職は逆らいのしるしであることを絶えず思い起さなければなりません。福音の教え全体をそっくりそのまま受け入れることは容易ではありません。これから先も、それが容易になることはないでしょう。教会は信仰と道徳に関する教えをできるだけ明白でわかり易くし、その神的な真理の魅力をそのまま伝える役目を委ねられています。

とは言え、世界に対する福音の挑戦的な要素は、代々伝えられたキリストの使信(メッセージ)に内在することがらなのです。

(米国司教へ、一九八七年)

茨の冠は人間の残酷さをあらわす

今日の聖母マリアへの祈りの集まりでは、〈茨の冠をかぶせられるイエズス〉つまり苦しみの玄義の第三玄義を黙想します。

福音書は、簡単にではありますが、この出来事について書いています。そこでは、ピラトの兵卒たちの攻撃と常軌を逸した遊びが強調されています。

マルコとマテオ、ヨハネは次のように記しています。「兵卒たちはイエズスを邸宅すなわち総督館の中庭に引出し、全部隊を呼び集め、イエズスに緋色の衣を着せ、茨の冠を編んでかぶらせ、『ユダヤ人の王よ、ごきげんよろしゅう!』と礼を始め、また頭を葦竹で叩き、つばをかけ、ひざまずいてひれ伏してみせた。」(マルコ15・16～19、マテオ27・27～30、ヨハネ19・2～3参照)

マテオは兵卒たちが与えた王の印についても触れています。「兵卒たちは王の杖としてイエズスの右手に葦竹を持たせたあと(マテオ27・29)、次はそれを取りあげて、主の頭を打った」のです。(マテオ27・30)

私たちは今、主の苦しむ姿を目の前にして、歴史の中で起った恐るべき狂気とあらゆる種類の残虐行為を思い出します。イエズスは、時として驚くほど残酷で邪悪な民衆の力にもすすんで従われました。

ヨハネの福音書を読んでいると、茨の冠をかぶせられたイエズスの苦しみを前にして、私たちの思いは崇敬と驚きに変わっていきます。「ピラトはまた外に出て人々に、『どうだ。この人をお前たちの前に連れ出した。私がこの人に何の罪も見出せなかったことを知らせるために』と言った。イエズスが茨の冠をかぶり、緋色の外套を着て外に出られたとき、ピラトは『見よ、この人を!』と言った。」(ヨハネ19・4～6)

ほんとうにこの〈人〉は、言いようのない苦しみを忍んで御父の救いの計画を実現された神の御子でした。神の御子は私たちの苦しみを本気でお考えになり、その結果、私たちと共にそれを味わい、その意義を高め、さらにそれを、命、恩寵、神との交わり、栄光への手段に変えてくださったのです。

その日以来、すべての時代の人々が茨の冠をかぶせられた御方の御前で自分の態度を明確にするよう求められています。だれもあいまいな態度をとることは許されないのです。各自が、言葉だけでなく生き方で、はっきりした態度をとるべきなのです。

人間を破滅させ他人に対しては残忍な行為の原因となる高慢や思い上り、功利や快楽などを抑える努力をすれば、キリスト者は自らの頭上に茨の冠をかぶせることができます。

四旬節は、私たちの苦しみの原因である奴隷の状態から抜け出せと招いています。人間であり神である主が私たちの間に立っておられます。この主は、神の愛と兄弟姉妹の愛に向う救いの道を歩むとき、困難や苦しみを乗り越えるため、新たな勇気を与えてくださいます。

至聖なる聖母は、その険しい旅路を私たちに先立って歩み、復活という輝くゴールを示しつつ、歩みを早めるよう私たちを励ましてくださいます。

(二・二六)

説教・講話・書簡等の抄訳

一致の秘跡
韓国での聖体大会

聖体大会の余韻が残っている午後のひととき、各国代表者の方々とお会いできることを心から喜んでいます。今朝のミサは世界中から集まった巡礼者の大きなお祝いでした。主の食卓を囲む私たちみなの祈りは、使徒聖ペトロの後継者に結ばれた個別(地方)教会の力強い一致への祈りでした。(部分教会は…それらの中に、またそれらから、唯一単一のカトリック教会が存在する。『教会憲章』23)多くの民族や人種の男女から構成される教会は、神が教会を、全人類の一致の目に見える秘跡として設立されたことを、はっきりと思い出させてくれます。(同9)(…)

どの聖体大会も、神が御自分の教会に授けてくださった恵みの数々を思って感謝の心を深める機会となります。私たちは、イエズス・キリストにおいて、一人ひとりが新たな生き方、恩寵の生活へと生れ変るよう呼ばれています。私たちは洗礼と堅信の秘跡を機会に聖霊の力を受け、キリストの体である教会(エフェソ1・22参照)の一員となりました。ひとたびキリストの教会に属するようになった私たちは、キリストの一致をより一層深めるよう招かれています。「われわれはかれ(キリスト)によって生き、かれに向かって行く。」(『教会憲章』3)

神の限りない恵みへの感謝は、教会の聖体祭儀によって完全に表すことができます。自分の罪の深さと弱さを意識しながらも、私たちは神の子とされ、キリストと共に世継ぎとされた恵みに喜び躍ります。キリストによって、キリストと共に、キリストのうちに、私たちは十字架上で自らの独り子を犠牲とされた御父に賛美と感謝の完全な奉献をすることができます。復活された主は、大祭司(ヘブライ2・17参照)として、御自分の教会を天の父の栄光と全人類の聖化のために(永遠の典礼)として集めてくださいます。

聖体大会に参加し、今はソウルを離れようとする私たちはもう一度、主キリストがたえず教会に授けられる恵みの数々を、とりわけ聖体の秘跡を深い理解と尊敬をもって心に受けとめられるよう願います。聖体の秘跡に深い感謝の心を起すことは、とりもなおさず、慈しみの(コリント②1・3)神がお恵みになったものの他に私たちの手には何もないことを深く理解し、受け入れる時なのです。聖パウロは次の言葉で最後の晩餐について述べています。「主イエズスは裏切られた夜、パンを取り、そして感謝して後それを裂き、『これは、あなたたちのための私の体である。私の記念としてこれを行え』と仰せられた。」(コリント①23～24)　この偉大な信仰の神秘・聖体は贈り物、つまり(受けたもの)なのです。キリストから聖体を受けた教会は、この秘跡を祝うごとに、独り子イエズス・キリストを通してお与えくださったこと全てに対し、父なる神に感謝するのです。

私たちは、聖体を祝うごとにこの贈り物を新たに受け、その神的な力が心の隅々までゆきわたるよう戦わねばなりません。(…)

(八九・十・八)

原罪は根本的に人類を変えた
「罪」シリーズ ❸

1 創造と賜の授与、これによって神は人間を聖性と原初の義の状態(もともとの聖性の状態)におかれたのですが、こういう背景の中で創世の書の最初の罪の記述(第三章)を読むと、その意味が非常にわかりやすくなります。「善悪の知識の木の実」を食べてはいけないという神の命令への背反を中心としているこの記事は、古代のテキストの性格、特にその文学類型を考慮に入れて説明されるべきです。しかし聖書の最初の書を学ぶにあたっては、この学問的な必要条件を心に留めておく一方で、罪についての詳細な記事から一つの確かな要素が明らかになることを否定することはできません。それは、原始の出来事、つまり啓示によれば人間の歴史の始まりに起った一つの事実のことです。まさにこの理由のために、人間と神との関係、そしてその結果としての人間自身の内的「状況」にとって、また人間相互の関係、一般に人間とこの世との関係にとってもう一つのある確かな要素、あの出来事についての根本的で疑う余地のない暗示が含まれています。

2 記述の下にかくれた真に重要な事実は、倫理的性質のものであり、人間の霊魂の根底に銘記されています。それは人間の境遇に根本的な変化を起します。人間は原初の義の状態から追い払われて、自分が罪深い状態にあることに気づくのです。罪が内在する状態であり、それは罪への傾きとなって現れます。この瞬間から、人類の歴史全体がこの状態にあえぐことになるのです。実際、人祖(男と女)は自分自身のためばかりでなく、人間家族の始祖として、全ての子孫のためにも神から成聖の恩寵を受けていました。従って、人間を神と相容れない状態にした罪を通して、人祖の恩寵の喪失(神の不興を蒙ること)は、子孫にまでも及ぶこととなったのです。啓示に基いた教会の教えによれば、人祖から受け継いだ原罪の本質は、人間の本性に加えられたこの恩寵の喪失にあります。

本質的な問題

3 創世の書の第三章に描かれた最初の罪についての記述を分析すれば、この遺産の性質を一層よく理解できるでしょう。ことの発端は、蛇の姿をとって現れた「試みるもの」と女との会話であり、これは極めて新しい重要な出来事です。創世の書はこのときまで男と女はさておき、創造された世界の中に理性をもつ自由な存在があることについては何もふれていません。第一、二章における創造の記事は「目に見えるもの」の世界にとどまっています。けれども、たとえこの会話の間は目に見える姿で示されていても、「試みるもの」は「目に見えないもの」・純粋に霊的なものの世界に属します。聖書でのこの悪魔(悪霊)の初めての出現は、新約・旧約両聖書の中でこの主題を扱っているすべての文脈を考慮しつつ深く考えられねばなりません。(前のカテケージスでは、すでにこれも取り扱いました。)　黙示録(聖書の一番最後の書)には雄弁に描かれています。「大きな竜、すなわち悪魔またはサタンと呼ばれ全世界を迷わすあの昔の蛇は、(創世の書第三章を引用していることは明らかです)地上に倒された」(黙示録12・9)と。なぜなら竜は「全世界を惑わし」、また他の時には「うその父」(ヨハネ8・44)とも呼ばれているからです。

不変の教え

4 創世の書第三章で読む歴史の始まりに犯された人間の罪・最初の罪は、この蛇の影響を受けて起りました。「昔の蛇」は、「神が『園の中にあるすべての木の実を食べてはいけない』と言われたのは、本当でしょうね？」と女をそそのかします。女は「園の中にある木の実を自由に食べてもよいが、『園のまん中にある木の実についてだけ、死なないためには、これを食べても、ふれてもいけない』と神は言われました」と答えます。しかし蛇は女に言ったのです。「ちがう、あなたたちは死なない。それどころか、あなたたちがそれを食べたら、その目がひらかれて神のようになり、善と悪とを知るようになると、神は知っているのだ」と。(創世3・1～5)

5 見たところ単純な形の下に隠されている人間の生命の本質的な問題を、このテキストの中から扱みとるのは難しいことではありません。ある一本の木の実を食べるか食べないか、そのこと自体は関係ないことのようにみえるかもしれませんが、「善悪の知識」の木となると、それは根本的な問題に関わる人間の生命の第一原理を表すものです。悪魔はこのことを大変よく知っています。「あなたたちがそれを食べたら……神のようになり、善と悪とを知るようになる」と言っている通りです。この木は、人間であれまたどんな被造物であれ、たとえそれがどんなに完全であったとしても、被造物に課せられた克服できない限界を示しています。被造物は常に単なる被造物にすぎず、神ではないのです。人間は、神のように「善と悪を知ること」も「神のように」なりたいと要求することも決してできないのです。神御一人だけが全存在の源であり、神だけが絶対の真理と善です。神のみが善と悪を測る基準であり、善と悪を区別する御方なのです。神のみが永遠の立法者であり、造られた世界の全ての法、特に自然法は、この立法者に由来します。理性的な被造物である人間はこの法をわきまえてこの法に導かれて行動しなければなりません。創造主に逆らってまでも創造主から独立し、何が善で、何が悪であるかを自分で決定したり、自ら道徳法を制定することなどできるはずはありません。自分こそ倫理的秩序の支配者だと主張して、神の座に着くことなど、人間であれ他のいかなる被造物であれできることではないのです。このような要求は、被造物自身の根本的な（存在論的な）構造に反するものだからです。(…)

6 見たところさして意味があるとは思えぬ創世の書の叙述ですが、そこには人間の根本的な問題が被造物としての人間の状態と密接に結びついていることが明らかにされています。理性をもつ存在である人間は、人間の存在の真理でもあるこの「第一の真理」の導きに従わなければなりません。自分自身が真理に取って代りたい、自分が真理と同等になりたいなどと主張することは人間にはできません。万一、この原理に異議を唱えるなら、創造主に対する被造物の「義」の土台は、人間の行動の根源までも揺がすことでしょう。「うその父」誘惑者（悪魔）は、神との真の関係を疑わせることによって、原初の義の状態（もともとの聖性の状態）をも疑問に付すのです。人間は悪魔に屈服し、個人的に罪を犯し(自罪)、人間の本性に原罪の状態を生じさせます。

7 聖書の説明からわかるように、人間の罪はもともと人間の心の中（や良心）から生じるのではありません。人間が自らすすんで罪を犯したのではなかったのです。ある意味では、人間の罪は目にみえない存在の世界ですでに起っていた罪の結果であるといえるでしょう。悪魔「昔の蛇」はこの目に見えない世界に属するものです。前もって知識と自由を与えられていたこれらの存在は、純粋に霊的な己れの本性にふさわしい選択ができるよう「試された」のでした。彼らの中には「疑い」が生じました。そして、それは創世の書第三章に詳しく述べられている悪魔による人祖の誘惑というかたちで再び現れます。全ての被造物、特に霊的被造物に与えられた善の唯一の源泉である創造主を、目に見えぬ存在であるものたちはすでに疑い、そして非難していたのです。全被造物が創造主に従属することを要求する存在の真理に異議を唱えたのです。この真理は、原初の高慢に取って代られました。その高慢のゆえに、彼らは自分自身の精神を自由の原理および基準にしようとしたのです。彼らは「神のように善と悪を知る」力を要求した最初の存在でした。そして彼らは、被造物としての自分たちの存在の要求に従って「神の内に」在ることを選ぶ代りに、神の上に立つ方を選んでしまったのです。誰が神のようになれましょう。そして人間は、その誘惑者（悪魔）の暗示にのせられて、反抗的な霊(悪霊たち)の奴隷となり、共犯者となりました。

8 創世の書の第三章によれば、人祖が「善悪の知識の木」の傍で聞いた言葉には、被造物の自由意志の中で生じるあらゆる悪の攻撃が含まれています。そしてそれらは、全ての存在と全ての善の源である創造主、絶対に公平で真に父らしい愛である御方、本質からして与える意志である御方への反抗となるものなのです。この与えた愛が、反抗と否認、拒絶に出遭ったのです。「神のように」なりたいと望む被造物の姿は、聖アウグスティヌスが「神をあなどる程の自己愛」(『神国論』XIV 28 PL 41, 436)と、非常に適切に表現している状態の具体的なあらわれです。これは、おそらく歴史の始まりにおけるあの罪についての概念を最も鋭く正確に説明するものでしょう。それは、悪魔の示唆に人間が従ったために起ったことでした。神を拒絶し、神を軽蔑し、神に関わるもの神から出たものを何事も全て憎むことになったのです。

不幸なことに、これは歴史の曙に起った唯一度きりの出来事ではなかったのです。本当に、あの最初の罪の遺産だとしか思えぬような人生の事実や、行いや言葉や状況に何とたびたび出会うことでしょう。

創世の書は、あの罪をサタンとの関係の中に位置づけています。またこの「昔の蛇」についての真理は、後になって聖書の中の他の数々の箇所で確証されています。

9 人間の罪は、こうした背景の中でどのように示されているでしょうか？　創世の書第三章には次のように書かれています。「すると女は、なるほどその木(の実)が食べてもおいしく、見ても美しく、知識を得るために食べるねうちがあると思うようになり、その実をとって食べた。そして一緒にいた男にも差しだすと、男も食べた。」(創世3・6)

聖書独特の方法で詳しくなされたこの叙述は、何を示そうとしているのでしょうか。それは、「この木の実を食べれば、知識を手に入れることができる」という悪魔の保証にそそのかされて、人祖は創造主の御意志に逆らって行動したことを証明しているのです。けれども人間が「うその父」の言葉の中に含まれている神の否定と憎しみの全てを、何から何まで受け入れたのだとは思えません。そうではなくて、善悪を知れば人間も「神のように」なれると考え、創造主の禁令に反して、創られたもの(木の実)を利用する提案を受け入れた、ということです。

聖パウロによれば人間の最初の罪は、特に神への不従順（ローマ5・19参照）にあるのです。創世の書第三章を分析し、この驚くほど深遠なテキストを深く考えると、あの「不従順」がどのようにして起り得たか、またそれが人間の意志の中でどんな方向に発展していくことができたのかがわかります。創世の書第三章に描かれた「最初の」罪は、ある意味で人間の犯し得るあらゆる罪の「原型」を含んでいると言えましょう。

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部八十円　送料実費
■一年予約九〇〇円　送料六〇〇円　■二十部以上の一括購入なら送料不要
郵便振替　神戸　3-72393